

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

（領域ごと）

- | | |
|---------------------|-------------|
| ①（1）言葉の特徴や使い方に関する事項 | 良好な結果であった |
| （3）我が国の言語文化に関する事項 | 大変良好な結果であった |
| ②A話すこと・聞くこと | 良好な結果であった |
| ③B書くこと | 概ね良好な結果であった |
| ④C読むこと | 良好な結果であった |

（問題形式）

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 良好な結果であった |
| ②短答式 | 大変良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

（無解答率）

概ね良好な結果であった

（その他）

- 最も正答率が低かった設問：1二
図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する設問
【領域：B書くこと 問題形式：記述式】
- 無解答率が高かった設問：3二
目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめる設問
【領域：A話すこと・聞くこと 問題形式：記述式】

分析

14ある設問のうち、12の設問が全国の正答率を上回っていた。問題形式別にみると、記述式以外は全て全国の正答率を上回っていた。

一方、正答率が低かった記述式は、無解答率も高く、記述式の問題を苦手とする児童が多い。正答率の最も低かった1二の誤答の類型をみると、条件を満たせていない児童が多く、図表やグラフから分かる複数の情報を結び付けながら、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題がある。

また、2四、3二においても、文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめたり、目的や意図に応じて話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめたりする力に課題がある。

これらをふまえ、日々の授業において、複数の情報を整理し、相手に自分の考えが伝わるように書き表す学習や、目的や意図に応じて、根拠を明確にしながら自分の考えをまとめる学習を、低学年時より意識して取り入れていきたい。

〇●算数●〇

(領域ごと)

- | | |
|-----------|-------------|
| ① A数と計算 | 大変良好な結果であった |
| ② B図形 | 良好な結果であった |
| ③ C変化と関係 | 良好な結果であった |
| ④ Dデータの活用 | 大変良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|-------|-------------|
| ① 選択式 | 大変良好な結果であった |
| ② 短答式 | 良好な結果であった |
| ③ 記述式 | 大変良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

○最も正答率が低かった設問 : 2(4)

テープを直線で切ってできた二つの三角形の面積の大小について分かることを選び、選んだわけを書く。

→高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる。

【領域:B 図形 問題形式:記述式】

○無解答率が高かった設問 : 4(3)

二つのグラフから、30分以上の運動をした日数が「1日」と答えた人数に着目して、分かることを書く。

→示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、見いだした違いを言葉と数を用いて記述できるかどうかをみる。

【領域:D データの活用 問題形式:記述式】

分析

16ある設問で、すべての設問が全国平均の正答率を上回っており、良好な結果であったと言える。

正答率の低かった設問は「図形」の領域で、高さの等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断する問題である。2番目に正答率の低かった問題も「図形」の領域で、切って開いた三角形を正三角形にするために、テープを切るときの角の大きさを書く問題である。四角形の名前を書く問題の正答率は非常に高く、基本的な知識は定着しているが、図形を多角的にとらえるなど、応用することには課題がある。三角形の高さを自ら見つけさせ計測させたり、向きを変え図形を提示したりするなど、問題提示の工夫が必要である。また、図形を切ったり開いたりして、具体物で確認させることも大切である。

正答率は低くないものの無解答率の高かった4(3)は記述式であったが、あと2つの記述式の問題は無解答率はそれほど高くなかった。普段から、考え方を説明する力を身につけられるよう学習の中で意識的に取り組んできた成果であると考えられる。ただ4(3)のように、情報量が多い設問にも対応することができるよう、必要な情報を探し出し、自分の考えを整理して書く力をつけることが大切であるといえる。

ただ計算ができたり概念を理解したりするだけでなく、より深い理解を伴ったものにするために、既習知識を活用したり式や図を使ったりして、筋道立てて自分の考えを表現する力を育む学習を1年生から日常的に取り入れることを意識していく。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

全国平均と比較すると、国語、算数ともに全国平均を上回っている。また、校内の平均正答率においても、国語・算数ともに前年度を上回った。

しかし、国語・算数どちらにおいても、資料などを活用して自分の考えをまとめたり、根拠を示して自分の考えを表現したりする力に課題がある。

学力高位層と学力低位層

エンパワー層についての分析

前年度と比較をすると、国語・算数ともに学力低位層の割合が減り、中間層の割合が増加した。特に、算数において、変化の割合は大きかった。また、エンパワー層の割合は減少しており、特に国語では今までで一番少なかった。

引き続き、低位層が主体的に学習に取り組めるよう、個に応じた指導・支援を充実させていく。

○●取組み●○

◎学力向上に関する取組み

今年度の学校研究テーマは「自信を持って、自分の思いを表現する力の育成～互いに認め合う集団をめざして～」である。学力向上部会では、「児童が主体的に学びながら考え・表現する力をつける授業を目指して～国語科における言語活動の充実～」をテーマに、国語科の研究を進めている。講師を招いての研修会、校内研究授業(6年生:海の命)、学年学級を越えて授業を参観し合う期間を設ける等、教職員の授業力向上を目指し、創意工夫をして取組みを行っている。

全国学力・学習状況調査の結果分析をもとに、本校の児童につけたい力を学校全体で把握し、系統立てた授業づくりの計画・実践を行っていく。今回の結果では、国語科において、記述形式で解答する設問の正答率・無解答率に課題があった。このことから、自分の考えをまとめたり、相手に分かりやすく伝えたりすることを苦手とする児童が多いことがうかがえる。そこで、各教科において言語活動を充実させ、自分の考えをまとめ、相手に伝える場を積極的に設けていく。そして、児童が主体的に考え、表現できる力を育ていきたい。

さらに、非認知能力育成のため、キャリアパスポート等を活用しながら、児童が自分で目標を設定・実行・振り返りができるようにしている。本校の課題である「自分力」「つながり力」向上のため4つのキャラクターを作成し、児童が日々意識できるよう働きかけている。

◎人権教育に関する取組み

今年度の人権教育部会の研究テーマは「平和学習」で、「ひととつながり、ともに学ぶ、個を生かし互いに認め合う集団づくり」である。児童が安心して自分を表現できる学級、学校をつくるため、教職員自身が人権感覚を養い、児童の小さなサインや変化を見逃さないよう努めていく。また、何事にも意欲を持って取り組める児童の育成や、学びを深めることができる学級づくりが学力の向上にもつながると考える。そのため、校内研修会などをとおして、児童が学習のテーマを自分事として捉えることができる授業展開を研究していく。

◎支援教育に関する取組み

支援教育部会を中心に、個に応じた指導・支援の工夫を行っている。児童に寄り添い、一人ひとりの課題に応じた適切な支援を行うことを目指している。また、スクールサポーターを積極的に活用しながら、教職員同士も連携・協力し、配慮が必要な児童や、学校生活に不安がある児童のケアを行っている。また、必要に応じて SC や SSW とともに積極的に連携を図っている。

◎中学校ブロックでの保幼小中連携の取組み

週に一度、中学校の外国語教員が高学年の授業に入り、授業などでの児童観察や教材研究、教職員の指導力向上に取り組んでいる。児童にとっても、進学先の先生であるという安心感を持つことができ、中学校への段差解消の一助となっている。また就学前の園児の観察や、中学進学に向けての児童観察など、連携・協力をして、校区全体が一つになって子どもたちを育てていく体制をとっている。可能な限り保幼小中連携、地域との連携も深め、児童同士のつながりを育て、地域ともつながりながら教育活動を行っていく。

「自信を持って、自分の思いを表現する力の育成～互いに認め合える集団をめざして～」の目標を達成するためには、児童にとって、安心して学べる教室が不可欠である。また、学校全体の共通理解のもと、児童が自信を持って自分の思いを表現できるよう指導していく。今後も、学力向上と人権教育、支援教育それぞれの観点を大切にし、児童の学力向上と児童の人格形成に、教職員一同が尽力していく。